

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：劉文兵

劉文兵氏の博士學位請求論文「映画における上海イメージの形成と変遷」は、上海という都市イメージが、ハリウッド映画をはじめとする多くの映画によって、どのように表象され、ステレオタイプ化されたイメージが反復と逸脱を繰り返しつつ、ついには現実の都市をも規定するに至る過程を、多量の映像資料からまとめ上げた論考である。これは、大量消費時代における映画の「神話的意味作用の強度」という点からいっても、分析に値するテーマであり、日本語における先行研究がこれまでなかった中での主題選択の先見性と、資料収集及び分析に対して払われた努力が評価される労作と言えよう。

本論文の独自性は、第一に 1920 年代から 2000 年にかけての上海に関係する映画表象を洗い出し、その変遷を描いた網羅性にある。ハリウッドや日本にとどまらず、中国語圏の映画が広く扱われ、上海を描いた映画の多くがカバーされている。またサイドの「オリエンタリズム」的な視点と「ポスト・コロニアリズム」的な分析方法が意識され、「画面の物質性に即した分析」が意図されている。この方法論の自覚は、従来の中国映画研究に見られたイデオロギー重視の分析を避けるものであり、中国や香港、台湾から距離を取ることが可能な日本で研究を行う意義を示すものでもある。さらに、上海イメージを政治的なステレオタイプと風俗的なステレオタイプに区分し、ステレオタイプ論として論じる努力も、中国映画史の記述として新たな可能性を見せるものである。

本論文は三部によって構成される。第一部の「ハリウッドの上海、上海のハリウッド」では、1930 年代のハリウッド映画とその影響を受けながら成長した上海映画における上海イメージが検討される。まずハリウッド映画における中国人の説話的役割と、その他者イメージの身体性の記号が分析され、スタンバーグ監督の『上海特急』と『上海ジェスチャー』が上海イメージの原点として論述される。とくに後者の「中国にあつて誰の場所でもない、おのれの欲望を表出することを許された自由な都市」のイメージが、日本軍占領地区に包囲されながら繁栄を続けた「孤島」期の租界の現実を踏まえたものであり、世界大戦という時代にあつて、単なるエキゾチズムを超えた上海イメージの特権化をもたらしたとする指摘は、説得力をもつ。一方、上海映画は「生活者の上海」を提起し、アパート映画という神話を生み出したとする。ハリウッドの作り出すステレオタイプに対して、貧しい労働者のイメージの反転や欲望の対象である女優の見返す視線が対抗軸として提起され、これらの表象によって中国人の自画像の獲得がなされたと結論づけている。これらの指摘は、上海映画論として新しい展開を可能とするもので、高く評価される。

女優イメージが上海という都市イメージと重複する点に着目し、「女の都・上海——上海

映画における女性像の変遷」と題して女優論から中国映画史の再構築を目指した第二部は、本論のユニークさを示す重要な部分である。第一章では 1920 年代から 30 年代の映画で人気を博す女性像が、カンフー映画の女性戦士からメロドラマのヒロイン、さらにモダンガールへと変化していく過程を分析し、モダンガールの身体性と上海イメージの連携が示され、50 年代の社会主義下で労働による女優の身体性の変化がプロパガンダの対象となる必然性が論証された。文革期を扱う第二章では、映画によって大量に複製されたプロパガンダ演劇が取り上げられ、その主人公となる男性化した女性共産党員像が、毛沢東の神聖性を侵食しない英雄として用意されながら、江青を女性指導者として暗示する過程でセクシュアリティをにじませるプロセスが、的確に記述され評価された。文革後を扱う第三章では、70 年代から 90 年代までスターであり続けた劉曉慶を縦糸に、セクシュアリティを明示し、欲望の対象としての女優というシステムを復活させることで、時代を象徴する存在となるプロセスが分析される。第二部については、新しい視点で映画史を再構築し、これを読ませる論述の力を評価する一方で、一部の用語についてはより適切な表現を工夫すべきという意見が、審査委員から出された。

第三部「上海イメージの政治学——ハリウッドの上海イメージとの葛藤」では、ハリウッドが形成した上海イメージが日本や中国にどのような葛藤をもたらしたかが分析される。日本映画ではハリウッドの上海イメージを借用しつつ、エキゾチズムと羨望の交じり合う複雑さを見せるとし、逆に社会主義下の中国映画では、上海を労働者の世界として再規定しながら、30 年代の租界イメージを否定するあまり、農村共同体的な表象を生み出したと指摘する。「ハリウッドの上海イメージの回帰」と題された第三章は、本論の中でも重要な位置を占める。90 年代の第五世代監督がハリウッドの上海イメージを断片化し、観客の想像の中に都市イメージの再構築を求めたことで、経済発展を遂げる現在の上海が、社会主義期のイメージを脱却し、自らの都市イメージを獲得する道を開いたという分析は、本論の独創性を示すものであろう。

上海イメージというきわめて映画的なステレオタイプに注目し、その形成と流布、反発と借用、反復と逸脱を広範囲な映画資料の収集によって分析し、80 年に及ぶ中国映画史を再構築してみせた本論文の論考は、その日本語運用能力とともに高く評価される。三部構成の各部分がやや相互の連携を欠き、一部に筆の走りや細部の訂正、方法論のさらなる意識化が求められる箇所も残るが、中国映画論に新たな可能性を示唆する興味深い指摘も随所に見られ、現時点での「上海イメージの形成と変遷」の分析としては、十分に成果を上げた論文であるという点で、審査委員の意見は一致を見た。

したがって、本審査委員会は全員一致で、劉文兵氏の提出論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。

別紙 3

最終試験の結果の要旨

論文提出者氏名 劉文兵

本審査委員会は、平成 16 年 1 月 10 日に論文提出者に対し、学位請求論文の内容及び専攻分野に関する学識について口頭による試験を行った。

その結果、論文提出者は博士（学術）の学位を受けるにふさわしい十分な学識を有する者と認め、審査委員全員により合格と判定した。